



保育者自省の好機

四月の新しい幼児らを迎えて

倉 橋 惣 三

自省は教育者不斷の心がけである。人間だれでも、自らを重んずるものにはそうであるが、教育者には尙そうである。教育者とは子供を教育する前に、常に自らを教育するものあり、子供と共にいつも成長しつゞけていくもので、なければならず、自省こそ、おとなの自己教育の途だからである。

しかも、平生は、子供を教育することに忙しくて、自己教育を怠ることがないといえない。たゞ時あつて、その心が強く促され、子供に向う心の目が、自分自身に向けられずにいられないことがある。偉大な教育者に接する時然り、先人の書を読む時然り、しかも、新しい子供を迎える時において亦然りである。

教育は惰性的になり易い。同じ子供に接するに同じ自分を以てして、外見にはそれで済んでゆくのである。自己内部においても、それで平気でいられるのである。教育者として

足りないまゝに、欠陥のまゝに、特に、自己獨特の短所のまゝに、それで済ましてもらわれるのである。らくらくと、いふ気になつて、子供の方でも、この先生はこういう人と、先生の欠陥にも、短所にも、すなおに馴れてゆくのである。そうして、いよゝゝ、『教育者の平然』が、一年二年と続けられてゆく。『人生師となる憂いの始め』という語には、多種多様微妙複雑な意味が含まれているのであるが、子供に馴れつこになり、教育に馴れつこになり、自己に馴れつこになり、旧態依然の無自省、無成長に慣らせられ易いことも、語にいうところの、憂いの中の最大なものである。遂にそれを憂えとせざるに至つて、憂、これより甚しきはない。

春陽四月の自然は人を新たにす。室にあつては、冬中掃き出しなかつた積つた埃が目につく。外に出ては、脂ににじ

んだ古衣のよごれが気になる。新しい花の前に立つては、自分の醜汚が省みられ、生き／＼とした蝶に遇うと、自分の鈍重が恥かしくなる。自らを新しくしたいところに、新春の快味と幸福があるのである。

四月毎に新しい子供らを迎えて、——自分の組にせよ、隣の組にせよ——教師に新しい自己を蘇らせ改新させることは、天の自然の配剤とまでいかないとしても、教育のよき配剤である。日に新たにしてみたら日に新たなりとまではいかないとしても、年に新たにしてみたらまた新たなり位の面目は、四月の教師にあつてよかるう、四月を教師自省の好機とする所以である。

なにも新衣に装いこらすことはいらない。しかし、新しく来る日の子供等の顔が、母の手にきれいに洗われているほどには、先生の心の肌もよく洗われていたい。子供等の爪が切られているほどには、先生の心の爪もまるくされていたい。心におしろいの艶を添え給えというのではないが、ちらりと剣の鋭く出る目と暗い皺のよる癖のある額とを、心の鏡に省みる位は、大して手間暇のいることでもあるまい、しかも、それは子供のためにだけではない。教育のためにだけというでもない。自分そのものゝためである。勿論子供らは何んの批判もしなく。しかし、無批判に對してこそ、自己批判が
くんのよめ。

教育に従事すること年々、誰れだつて経験——それも多くは自己流の——は、おのづから重ねられる。その結果が老巧である。老巧が新参より尊いのは素よりである。しかも、多くの老巧は、子供の扱い方の手なれである。その人自身の価値は、必ずしも去年一昨年と変らないかもしれない。四月になつて省みると、去年の四月から一冊も心の書を読み重ねていない先生が、ないでもない。本を多く読むことが、實際教育者にそんなに必須のことではないかもしれない。しかし、読もうとしなかつたこと、読む必要を自己のために感じなかつたこと、いゝ本を読んで補わなければならぬ欠陥と空乏とを、自己に痛感しないことは、自省を心がけているものとはいえない。そういう先生は、自己を新しくしない人である。

子供のために自己を勞することは、いうまでもなく、教師の第一義であり、大に尊敬すべきことであるが、如何に貴い生活でも、自己を消耗するだけで養われない人は、疲れるだけで蘇らないことが多い。疲れたる老朽者とならないとも限らない。御苦労は多とすべきだが、その人の教養のためには、余りに御苦労だけであつたと言わざるを得ない。自己の教養の蓄積に、余りに氣をとめる時間のなかつたことを、氣の毒とせざるを得ない。